

生物多様性を軸に地域づくり

生物多様性とはさまざまな生きものが暮らし、互いにつながり合うことで自然のしくみが健全に保たれている状態を指す。しかし、人の暮らしに伴う開発や外来生物の侵入、気候変動の影響などによって、生きもののすみかが失われつつあることが大きな課題となっている。

こうした変化は私たちの生活にも影響するため、企業や住民が一体となって自然を守り育てる取り組みを進めることが欠かせない。県内では、生物多様性を軸にした地域づくりが広がっている。

県は「みえ生物多様性推進プラン（第4期）」で、多様な主体の連携・協働が自然環境の保全や自然の適正な活用を推進するために必要な基盤と位置づけ、普及啓発や自然保護団体と企業のマッチングなど、さまざまな施策を展開している。この視点は市町の取り組みでも広がりがみられる。

亀山市の「かめやま生物多様性共生区域認定制度」は、その象徴的な例だ。里山や企業の緑地など、地域に残る自然を企業・市民・団体が管理し、その取り組みを市が認定・支援する仕組みである。認定区域には有機栽培の水田やキャンプ場なども含まれ、自然を守るだけでなく、育て、活かす姿を対外的に示している点が特徴だ。

いなべ市では市民参加型の生きもの調査「イナッチュクエスト」を展開。スマホアプリで生きものを撮影・投稿し、集まったデータをまちづくりに生かす試みだ。自然の魅力を街の整備に取り入れる「グリーンインフラ」をテーマとしたプロジェクトの一環として実施されており、楽しみながら地域の自然を知り、保全に参加できる仕組みになっている。

これらに共通するのは生物多様性を地域の価値として再発見し、地域づくりに生かそうとする姿勢だ。生物多様性は単なる環境保全のテーマではなく、地域の誇りや産業、文化を支える基盤でもある。こうした取り組みが、自然と暮らしを豊かにする大きな流れへと発展していったほしい。

(PPP/PFI事業部 主任研究員 川北 晃二)